



測量家・探検家

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

18世紀後半、ロシアがオホーツク海沿岸に進出すると、江戸幕府は蝦夷地防衛のため、正確な地図の作製に迫られます。伊能忠敬は測量、間宮林蔵は測量のほか樺太（現サハリン）探索にも心血を注ぎました。幕末には松浦武四郎が内陸部にまで入り、詳しい地名や川の名称を調べ上げます。

伊能忠敬 きっかけは婦人の質問

伊能忠敬は55歳から71歳まで10回にわたり全国を測量し、極めて精度が高い地図を完成させました。1800年の第1次測量では、東京から北海道を目指し、青森県三厩^{みんまや}から函館へ向かいます。しかし、途中で風向きが変わり、上陸したのは福島町吉岡でした。

福島町史研究会会長の中塚建設社長、中塚徹朗はこの史実を講演会などさまざまな催しで説明してきました。町内の歴史街道を案内する古道ウォークで「1800年、伊能忠敬は福島町の吉岡川に上陸し翌日、測量が始まりました。これが日本地図の第1次蝦夷地測量のスタートです」と説明すると、ある婦人が「その偉業をたたえる石碑などはありますか」と問いかけてきました。

町内には上陸を記す木柱が1本あるのみ。史実が正しければ証明する物にお金をかける必要はないと思っ

ていた中塚は、この質問に考えさせられました。すでに函館山山頂には「伊能忠敬北海道最初の測量地」と記された記念碑があり、測量開始地は函館だという認識が一般的でした。

そこで、町長の鳴海清春に石碑の設置を相談すると、話は思いがけない方向に発展、忠敬没後200年を記念し銅像を建設することになります。

町は2018年の建設を目指し2016年7月、「福島町伊能忠敬北海道測量記念碑建設基金」を創設、期間を2018年3月末までとし寄付を募ります。

町教育委員会と町史研究会は機運を盛り上げるため、忠敬の測量日記と書状を読み解く勉強会や、忠敬をテーマにした講演の発表会を開きました。

その結果、趣旨に賛同した函館測量設計業協会が100万円を寄付するなど支援の輪が全国各地に広がり、目標の1千万円は2018年1月に突破しました。

一方、制作した横浜在住の彫刻家酒井道久は2001年、東京の富岡八幡宮にある忠敬像を手掛けた人物です。紹介したのは、中塚が加入していた伊能忠敬研究会の創立者で名誉代表の渡辺一郎でした。

富岡八幡宮の像は測量の旅姿でしたが、福島の場合はかがんで測量器をのぞき込んでいます。酒井は「人物の銅像というと堂々とした立ち姿を思い浮かべます

が、私は伊能が今まさに、吉岡で測量を始める姿にしたかった」(北海道新聞渡島松山版2020年7月3日)と語っています。

鳴海は2017年11月、酒井のアトリエを訪れ、制作状況を確認するとともに、忠敬の旧宅がある千葉県香取市の市長を訪問。同市でも没後200年記念で銅像制作を進めていることから、お互いに事業を盛り上げることを約束しました。

国道沿いで吉岡漁港に隣接する銅像建設地は「伊能忠敬北海道測量開始記念公園」として整備。忠敬像の横には、北海道測量開始地点が吉岡だという渡辺の説明文を掲示しました。

大型連休を前にした2018年4月27日の除幕式には、酒井や忠敬の7代目にあたる洋画家伊能洋らが招待されました。松前神楽保存会が国の重要無形民俗文化財「松前神楽」を披露。来賓らが幕を引くと、函館の方を向いて測量する忠敬の姿が現れました。中塚は「間違いない歴史はここに誕生した。あのご婦人には心から感謝したい」と思いました。

そして今では、忠敬像が学習の場となっています。隣町の学校からも子どもたちが歴史を学びに訪れます。講師を務める中塚は「銅像は過去のものではなく、これからのものでなければならない」と実感しています。



腰をかがめて測量する伊能忠敬像

間宮林蔵 胸像さらには立像も

間宮林蔵の功績は蝦夷地測量に加え、樺太が島であると確認したことです。最初の探索は1808年4月。幕府の役人に従い宗谷から樺太に渡りますが、途中で北上を断念し引き返します。同年7月には単身で樺太に向かい翌年5月、北端まで踏査し、樺太と大陸が陸続きではないことを確認しました。その際、目撃した海峡は「間宮海峡」と呼ばれています。

この樺太探検から150年になるのを記念し、稚内市は1958年、宗谷地区にある護国寺の前山中腹に胸像を建てました。同年は開基80年、市制施行10年となることから、除幕式は記念祝賀行事に組み込まれ、8月11日に実施されます。

ところが、この日は全道市長会が市内で開かれ、市長をはじめ市職員の関心は会議の運営に注がれていました。出席したのは宗谷支庁長、市助役、地域住民ら約50人。地元郵便局の局長の娘が幕を引き、西岡斌市長の式辞は助役が読み上げました。

胸像は高さ30センチほどの小さなものですが、階段状の台石の中央部に設けられた台座の上に設置され、周囲には高さ2メートルのコンクリート塀が張りめぐらされました。「間宮林蔵樺太探検記念碑」と刻まれた文字は内閣総理大臣岸信介の書です。



宗谷公園にある間宮林蔵の胸像

その後、階段状の台石やコンクリート塀は取り払われました。周辺は宗谷公園として整備されますが、胸像は公園の奥にあり、細い坂道を歩いて上らなければならず、不便で目立たないことから、次第に忘れ去られていきます。

そんな中、日本最北端の地、宗谷岬の観光振興策として考え出されたのが、知名度の高い林蔵の立像建設でした。構想は1978年1月4日の北海道新聞に「宗谷岬に間宮林蔵の像 稚内二世紀の記念 来秋完成」という見出しで掲載されます。

しかし、銅像は1979年秋には完成しませんでした。新聞記事が出た当時「未だ林蔵に対する制作意欲が燃える迄に至らず資料集めや模索の為にいつしか一年が過ぎ、完成の時期を八〇年夏まで延ばして貰う事にした」と制作者の峯孝は雑誌に書いています。

取り組み始めたのは1979年1月ごろ。林蔵に測量技術を教えた伊能忠敬の記念館で測定器を確認したり、林蔵の生家で肖像画を見学したりしました。その結果、海上測量用の鎖でつないだ浮標ふひょうを持つ像にすることを決めます。

また、林蔵が樺太探検前、治水工事などに携わる普請役しんやくとして10年間、下積み生活をしていたことを知り「半ば英雄傑物としての林蔵ではなく、苦渋に満ちた彼の側面に共感を覚えられる様になって、やっと粘土の林蔵が私の前に現れた」と打ち明けています。

立像は林蔵生誕200年記念として、稚内市が1980年に1,500万円をかけて建設しました。除幕式が行われた7月13日は林蔵が2度目の樺太探検に出発した日です。地元の小学生が林蔵顕彰の唱歌「間宮海峡」を歌い上げた後、林蔵の出身地、茨城県伊奈村（現つくばみらい市）の子孫や村長の遠崎義夫、稚内市長の浜森辰雄らが幕を引くと、そこにはりりしい表情の林蔵が立っていました。

浜森は「峯先生には、功成こうなったのちの林蔵ではなく、出港の日の林蔵を一と特とにお願いした。今の青少年に、林蔵の勇気を持ち、未知の世界へ挑戦して欲しいと思

うからだ」とあいさつしました。

像の目の前に広がるのは、国境の海、宗谷海峡。決意を秘めて立つ林蔵は、そのはるか先にある「未知の世界」を見つめています。



宗谷岬に建設された間宮林蔵の立像

松浦武四郎 原型はすでに戦時中に制作

幕末期の北海道を6回も踏査し、アイヌ民族の文化や生活を克明に記録したのが松浦武四郎です。内陸部を詳しく記した地図を作ったほか、各地域の紀行文を「久摺日誌」「十勝日誌」などとして出版しました。

後に国立公園となる阿寒一帯を歩き、その存在を世に知らしめたのも武四郎です。郷土史研究家の佐々木米太郎は1951年、釧路市公民館長の丹葉節郎の依頼を受け武四郎についての講演を行いました。しかし、聴衆は数人しか集まらず、寂しいものでした。

その後、佐々木は丹葉に「武四郎を何とかして顕彰したい」と言い残し、亡くなります。丹葉は佐々木の遺志を継ぎ1952年秋、阿寒国立公園観光協会臨時総会で銅像建設を提案、承認を得ました。

そして、丹葉にとっては願ってもないことが起きます。東京在住の彫刻家中野五一と釧路で会った際、武四郎の銅像を建てたいと語ると、中野が「私はもう武

四郎の原型を作っている」と答えたのです。

戦時中、彫刻家団体が日本の勝利を祈り、全国各地の代表的な功労者像を制作することになりました。小樽出身の中野は北海道を引き受け、道内を調査して回り、武四郎像を完成させたというのです。

制作を依頼された中野は、1954年には銅像を仕上げ釧路に送りました。だが、募金や建設地の問題が残っており、銅像は釧路支庁いつくしまや巖島神社などを転々とし、ます。

結局、銅像の落ち着き先となったのは、新築間もない公民館の前庭（現生涯学習センター駐車場）でした。募金は33万円集まり、台座の費用は地元業者が負担しました。

銅像は武四郎と道案内をするアイヌ民族の古老が並ぶ構図。向かって右側の古老がひざまずきながら前方を指さし、左側に立つ武四郎はその方向を見つめ、筆で何かを書き込もうとしています。

念願の除幕式が行われたのは、銅像が釧路に届いてから4年後の1958年11月3日。東京から駆け付けた武四郎の子孫が幕を引き、実行委員長として経過報告に立った丹葉は、長年の苦勞に感極まり涙を流しました。



松浦武四郎とアイヌ古老の像

式後には、アイヌ民族が古代舞踊や武四郎をたたえる歌を披露。参加したアイヌ民族の中には、目を閉じ、しばらく顔をあげない者もいたそうです。

ところが、年月を経るにつれ、像の姿に異議を唱える人が出てきました。道内各地の武四郎碑を訪ね歩いた杉山四郎は著書で「アイヌ民族を跪かせたのはどうしてか。アイヌ民族は『協力』しただけという理由からか、つまり随行者だという理由からか」と疑問を投げかけます。

そして「アイヌ民族も立像にすべきではなかったか」とし「二人が肩を並べて話し合っているなり、二人とも前方を見つめている像がいいのではないか、その方が自然ではないか」と主張します。

銅像はその下にあった道道の富士見坂みづみ拡幅工事のため立ち退きを強いられ1994年6月、近くの幣舞公園に移設されました。釧路市街はもとより、遠く雌阿寒岳も望むことができる見晴らしのいい場所です。

この公園の近くに同年4月、丹葉の顕彰碑が建てられました。しかし、丹葉はそれを見ることなく同年2月、86歳の生涯を閉じます。アイヌ文化の保存、普及に人一倍尽力した人生でした。

その後、武四郎の銅像は1996年5月に小平町のにしん文化歴史公園、1997年5月には天塩町の鏡沼海浜公園に建設されました。

（敬称略、肩書は当時のもの）

<参考文献>

- ・福島町「広報ふくしま」2018年6月号
- ・稚内市「市政だより」1958年7～9月号
- ・峯孝「間宮林蔵」『北方文芸』1980年1月号
- ・稚内文庫編集委員会編「北限への招待 稚内文庫第2巻」稚内市、1981年
- ・杉田幸三「日本の心 銅像は生きている」千代田永田書房、1971年
- ・丹葉節郎「松浦武四郎の銅像」『久摺 第一集』釧路生活文化伝承保存会、1992年
- ・釧路新聞社編「丹葉節郎 郷土文化に貫く情熱」、『丹葉節郎』刊行委員会、1983年
- ・杉山四郎「武四郎碑に刻まれたアイヌ民族」中西出版、2017年